

サッカー日本代表が世界を制するために
—ボランチの役割に着目して—
星 克弥 (競技スポーツ学科 コーチングコース)
指導教員 松田 保

キーワード：ボランチ、シャビ、遠藤保仁

1. 緒言

前回大会の2010年南アフリカワールドカップでは岡田武史監督がベスト4入りを宣言しながらも結果はベスト16にとどまった。日本がレベルアップして世界を制するためには攻守の要で勝負のカギを握るボランチの役割に着目する必要がある。ボランチとは中盤下がりにポジションをとり、攻撃の組み立てや相手の攻撃の芽を摘む、攻守の重要な役割をこなすポジションであり、ポルトガル語でハンドルや舵取りという意味を持つボランチの働きによって試合展開勝敗が変わると言っても過言ではない。

本研究では、ボランチの役割に着目し、FIFAランク1位スペイン代表のシャビ選手と日本代表の遠藤保仁選手に着目して比較研究することを目的とした。

2. 研究方法

2013年FIFAコンフェデレーションズカップのグループリーグ、遠藤保仁が出場している日本の3試合とシャビが出場しているスペインの3試合を対象としVTR分析する。

ピッチを守備ゾーン、中盤ゾーン、攻撃ゾーンに3分割し以下の項目を各試合分析した。

- ・各ゾーンでのパス成功数/失敗数
- ・各ゾーンでのパス成功率
- ・各ゾーンでのシュートに結びついたパスの回数
- ・各ゾーンでのボール奪取回数
- ・各ゾーンでのボールタッチ回数

3. 結果と考察

VTR分析し最も差が出たのはボールタッチ数で、特に中盤ゾーンと攻撃ゾーンでボールタッチ数が圧倒的にシャビ選手の方が多かった。その中でどちらのゾーンでもパス成功率でもシャビ選手が上回った。

守備の面ではボール奪取回数で遠藤選手が上回った結果となった。原因として考えられるのは日本代表の方が守備に回る時間が多いためだと考えられる。しかしシャビ選手は数字的な守備の貢献は結果として見られなかったが、前線でボールを奪われたあとの速い切り替えで前線や中盤でボールに制限を加えることで組織の守備をコンパクトにコントロールするプレスディフェンスの中心としてプレーしていたことで守備に大きく貢献していたことがわかった。

4. まとめ

結果と考察から、豊富な運動量で中盤ゾーンと攻撃ゾーンでボールに関わり、プレスの強い攻撃ゾーンでミスをせず的確な判断と高い技術で攻撃のアクセントになることが世界と戦っていくためには求められる要素だということがわかった。

守備では自分からボールを奪うことよりも、ボールを奪われたあとの速い切り替えで前線や中盤でボールに制限を加えることによって、組織の守備をコンパクトにコントロールするプレスディフェンスの中心としてプレーする必要があることがわかった。

5. 参考文献

- 1) ジョアン・サルバンス (2009) 史上最強バルセロナ 世界最強の育成メゾット
- 2) シャビ=著 今井健策 (ファンルーツ) =訳 (2010) シャビ バルサに生きる
- 3) 村松尚登 (2009) テクニックはあるが、「サッカー」が下手な日本人
- 4) 小澤一郎 村松尚登 (2013) 日本はバルサを超えられるか